

夏季福音特別集會 第4回

キリストの賜う「愛」と「祈り」

2019年8月25日（京都KKRくに荘）

奥田 昌道

すべては賜ったもの 常に感謝 讚美 祈り 「コリント後書4章 ローマ書5章、コリント後書11章 ペテロ前書1章 ローマ書8章 ヨハネ第一書2〜4章 「コリント前書13章 祈り」

●すべては賜ったもの

いよいよ最後の第4回の集會に入りました。私はタイトルをすべて「キリストの賜う」という枕詞まくらごしほを付けました。我々のすべては、賜った戴きいただものである。旧い我はもう主と共に十字架に付けられて死んでしまっている。そして、新しい生命をいただいた。ですから、この「キリストの賜う」というのもそういうふうには、ひとたび我々は、

「主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と。新しく生まれさせていただいた。その私というものにキリストの方から無限無量にいいものを下さる。それを、

「はい、ありがとうございます」

と聞いていただく。すべては戴きいただものです。私たちのすべては賜ったものであるという自覚が大事だと思います。

自然界を見ましても、太陽の恵みは悠久ゆうきゆうの昔から、地球は太陽の恵みによって生かされてきているわけです。地球の中に潜んでいる資源、石炭とか石油とか、そういったものも全部、太陽の恵みで造られている。太陽は空気を清めてくれる。そして、自然現象としての雨を降らせ、清らかな空気を私たちにいつも与えてくれる。太陽は悠久の昔から輝き続けて、生命を与えつぱなしである。地球は太陽に対して何一つ恩返しもししていない。

「天の父の全きが如く全かれ」

と、キリストが言われた。

「天の父は善き者の上にも悪しき者の上にも日を昇らせ、直き者にも直からざる者にも雨を降らせ給う。汝ら、天の父の全きが如く全かれ」

という。つまり、天の父は完璧な愛である。与えつぱなしの一方的な愛である。そういうお方の心を心とせよと。それは人間にできないことです。人間にできない。これはみなエゴがあるからです。自己保存本能があるからです。

そういうエゴ、これを聖書は「肉」と呼びます。自己中心的な在り方。そういう生まれながらの、いわば生き物としての我々は、自己保存本能なくして生きられない。自己保存本能でなくて、



「ご飯も要りません、何も要りません」

とやれば、これは枯れ木のように死んでしまいます。だから、食欲も性欲もその他いろいろな欲望というのは、生物体として生存のために必要なんです。しかし、その中に埋没していたのでは、これはまたダメです。だから、それを乗り越えて、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず。御霊みたまのキリストわがうちに生き給う」

という、絶えずそういう格闘を経ながら、天の高みへと引き上げられていく。それが我々クリスチャンとしての人生ではないだろうか。そんな思いがいたします。

主と共に十字架せられたら、食欲も性欲も何もすべてなくなったら、それは死んでしまいますよ、そんなことをやったら。それはまだ早すぎますよ。向こうの天の次元、天界に行ったら、そこではもう嫁とついだり娶めとったりすることはないと、キリストも言っておられる。

「七人の兄弟に順番に嫁いでいって、天国に行ったら、いったい誰の奥さんになるんですか？」

というような問答がありますが、そのときも、

「向こうの世界では娶ったり嫁いだり、そんなことはないんだ。そういう天使のような存在だ」

ということを言っておられます。我々は、この地上で肉体を宿としている限りは、いろんな戦いがあります。しかし、それに囚われていたのでは、全然前へ進めません。だから、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

という、その告白は、そういった肉なる自分、生なまの自分、これは依然として存在しているんです。いくら、

「十字架でキリストが我々のために死んでくださった」

といったって、生なまの自分というものはいつまでも残ってます、私たちは現実に。しかし、にもかかわらず、

「本当のお前はもう十字架されしまっている。本当のお前は私の生命を生きている。

後を振りかえらないで、前に向かって限りなく進め」

という、進軍ラッパが鳴っている。パウロは、

「もう走るべき道のりを果たし走り終えた。あとは義の冠が私を待っている。祭壇に血を注ぐことも、何とも思わない」

というようなことをテモテへの手紙で言っています。そういうふうな、我々は肉体を宿としていながら、しかも、それを乗り越えて、絶えず主の御力によって引き上げられて進んで行く。そんな歩みをしているのではないかということを思います。



●常に感謝、讚美、祈り

今日は第4回集会ということで、愛のところですか。信仰、希望、愛と、この三つがいつも大事だと言われます。コリント前書13章に、

「たとえ、私が天使の言葉を語るとも、あるいは山を移すほどの信仰があっても、愛がなかったら、私は全く空しい存在だ。愛は寛容にして、愛は慈悲あり、己の利を求めず、誇らず高ぶらず」

といったことがズラズラと書かれていますね。ああいう愛のすがたです。そして、

「いつまでも残るものは、信仰と希望と愛である。なかでも最も大事なものは愛である。最高のものは愛である」

と。よく、

「キリスト教とはどういう宗教ですか？」

と問われると、

「愛の宗教である。神は愛なり」

ということが言われるわけです。そういう命題として掲げたってしようがない。我々自身がそのような姿に成りきって歩んでいくということを主は求めておられると思う。

「そんなこと難しくできません」

なんて。それは生なまの人間、肉なる人間はできるはずがない。しかし、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と、キリストの方でちゃんと、

「本当のお前はもう片づいているんだよ、旧いお前は片づいてしまっているんだ。でなかったら、何のための十字架だったんだ」

と、キリストは言われますよ。

「十字架でああなたの旧いあなた、自己中心のあなたは全部片づけられている。それをしつかり受けとりなさい」

「でも、私の中にまだ残っています」

「そんなことは問題ではない。見えるところによらない。見えている現象の奥に本物のあなたが光っているんだよ。それを信じていきなさい」

「はい、ありがとうございます」

と。私は「ありがとうございます」しか言葉がないというのは、そういうことなんです。見えるところがどうであろうと。それは自分についてだけではない。人さまについても言えると思うんです。ご夫婦が喧嘩するのはみんな、生なまの相手の姿を見ているから。「こんなくしょう」とか、「この野郎」とか、

「こんなひとだと思って結婚したのではなかった」

とかね、まあいろいろなことが出てくるでしょうが。でも、そういう生のエゴイストの自



分ではない。それはもう既に十字架で本当は片づけられてしまっている。本当のあなた、本当の奥様、本当の旦那さん、これはもうキリストにあつて全く新しく創られたものである。「旧きは過ぎ去った。視よ、一切は新しくなりたり」

と、コリント書にある。やはり、「自分が可愛くてしようがない」という段階はダメです。

「私はもう自分がいやでいやでしようがない。もう生の自分を見たら嫌なんだ、吐き出したい」

という、そういう自己嫌悪に陥った者に対して、

「そうじゃないよ。生のお前は出来損ないかもしらんけれども、その奥に本当のピカピカ光っている素晴らしいお前をつくった。私は第二の創造をしたんだよ」

と。第一の創造、アダムの創造は失敗した。神さまから離れて、背いて。けれども、その背きを全部、キリストが十字架で引き受けて、

「われ主と共に十字架せられたり」

と。十字架せられて、生きている人があつたら、手を挙げてほしい。そんなのはいないですよ。十字架でキリストも死なれた。その時、我々も一緒に死んだ、殺された。だから私は

「無理」心中

と言ったでしょ。自分なんかそんなこと望んでもいないのに、キリストが勝手に私を抱いて十字架で私も一緒に死なせられたんですよ。それで死にっぱなしかというと、そうではない。忽然とキリストは本当の生命を顕してくださいました。

「その生命をお前にもやるよ」

と。キリストはご自分の中にあるすべて善きものを全部、我々に下さろうとしている。

●コリント後書4章

私は何を言いたいかというと、見える自分、見える相手、それにこだわってはダメ。その奥に本当の本ものが光っている。それを見ていきましよう。コリント後書の4章に、

「我々は見えるものでなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからである」

と書いてましょ。コリント後書の4章7節から、

「我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。」

自分のことを「土の器」といつている。しかし、その土の器にピカピカ光っている宝がある。それは賜ったものです。

8 われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、9 責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、10 常にイエスの死を我ら



の身に負う。

「これ、主と共に十字架せらたり」と、常にイエスの死を身に負う。

これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。

十字架で旧き我は死んだ。そしたら、新しいキリストのあのご復活の永遠の生命が我々の中にも芽生えている、与えられている。

11 それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付さるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。

ひとたび死ななければ、新しい生命は芽生えてこない。ヨハネ伝12章でも、

「二粒の麦、地に落ちて死なずば一粒にてあらん。死なば多くの果を結ぶべし」とあります。また、キリストは、

「私の弟子となりたければ、私に従って来たいと思うならば、日々己を棄て、己が十字架を負いて我に従え」

と仰っています。己に固執していたら、生の自分に執着して、それを何とか保持しようとしたら、これはもうそれで行き詰まりで終わり。そういうものをかなぐり捨てて、「主さまー」と言つて、キリストの中へ飛び込んでいけば、そこで旧い我はもう片づけられている。新しいキリストの生命が宿っている。そういう見えない世界での、新しい霊的な事態が展開していくんだよと。そういうふうには私は思います。

10 常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。

と、ハツキリ書いてある。

11 それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付さるるは、常にイエスのゆえに死にわたされている。これは本当に危機的状況です。それは、

イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。¹²さらば死は我等のうちに働き、生命は汝等のうちに働くなり。

今度は、「汝らのうちに生命が働く」と、そういうふうには展開していますね。そして、

14 これ主イエスを甦えらせ給いし者の我等をもイエスと共に甦えらせ、汝らと共に立たしめ給うことを我ら知ればなり。

これは何かビジョンを描いて言っているのではない。

「これは霊的現実である」

と、ハツキリ確信してパウロは言っている。見える現象的な我々の生き死にということの奥に、もう既に霊的な根源現実としてキリストは永遠の生命をそこにプロデュース（提供・創造）してくださっている。キリストが復活されたあの永遠の生命の質はこんなものだ、ということも顕された。それにあやからさせていただいて、同質になる。イエス・キリストという方はご自分の中にあるすべてのものを与えようとなさっている。我々をイエス・キ



リスト以下に放っておきたくない。イエスの中に生命が働いているなら、その生命を彼らに与えたい。イエスの中に働いている、父の神の無限無量の愛、これを人々にも与えたい。我々もそうでしょ。おいしいものをいただいたら、親しい者に

「これをどうぞ、おすそわけです」

と上げますね。お饅頭をもらったら、「半分どうぞ」と。ところが、子どもは人のものまで取ってしまうて（笑）、自分のものは与えることはしないという、エゴ、自己中心ですけど。本当は、愛する者に自分の持つていっているどんなものでも分かち与えよう、そして喜びを共にしよう、とそう思うのではありませんか。

まあなにか、パウロの気持ちはそんなふうな気がするんです。

「これ主イエスを魅えらせてくださった方が、私たちをもイエスと共に魅えらせ、共に立たせてくださることを私たちは知っているからである。」

と。

15 凡ての事は汝らの益なり。これ多くの人によりて御恵の増し加わり、感謝いや増りて神の栄光の顕れん為なり。」（コリント後4：7～15）

私は、クリスチャンとはどういう種類の人間かという、常に感謝、讚美、祈り、これに生きていく人だと思ふ。感謝、讚美、祈り。詩篇なんかそうでしょ、感謝、讚美、祈りでしょ。呻きもありますよ。呻きはもう全部、キリストが引き受けてくれる。そして、呻きも感謝、讚美、祈りに変貌させてくださっている。私はそう思っています。だから、クリスチャンで、ブツブツ、ブツブツ言っているのは、まだまだ入り口以前ですよ。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

旧い私、エゴイストの私、神さまに逆らう私、それは全部、十字架で片づいてしまった。その奥に新しいあなたがプロデュースされている。旧いアダムは死んだ。新しい第二のアダムを創りだしてください。それは、パウロは復活のところでは言っています。

「肉なるもので播かれ、霊なるものに甦る。朽つるもので播かれ、朽ちないものに甦る」

私は、あの「甦る」を「変貌する」と言いたい。甦るといふのは、たしかに死んでた者が息を吹き返すようなイメージですけども、そうではない。変貌している。変化する、変貌する。肉体をまもってこられたイエスが十字架の死を突き抜けて、一端、地獄に落ちてくださったって、そして、ご自分の本当の生命の質を顕された。あれが「復活」という言葉で表されている事態にすぎない。つまり、息を吹き返して元に戻るなんていうのではない。ラザロが甦ったのは、元に戻っただけです。けれども、そんなじゃない。イエスの中に隠された本質があのように出てきた。それに私たちは同質的にあやからさせてくださる。それがイエス・キリストの私たちに対する捨て身のご愛だと思っています。それに、

「はい、ありがとうございます」



と。我々クリスチャンというのはそういう存在ではないんだらうかと思っている。ですから、パウロもここでは、

「¹⁶この故に我らは落胆せず、¹⁷我が外なる人は壊るれども、内なる人は日々
に新なり。」（コリント後4・16）

と言っている。私も含めてみんな、歳をとれば、いろんなところが機能しなくなってきました。後ばかり振り返って、「あの頃は元気だった、あの頃はよかった」と（笑）、そういうことばかり言う。そんなことではない。外なる人は破れる。生物体としては、これは当然で、しょうがない。けれども、内なる人、霊なるあなた、見えないあなた、神さまがプロデュースしてくださった第二のあなた、それは日々新たに新たである。これを本当に、

「ごつとうさんです、ありがとうございます」

といただく。これなんです、私は。自分からは出ない。全部いただいたもの。無条件でいただいたものです。

「いや、こんな不信仰な人間、こんな罪びとでも……」

「そんなことをゴチャゴチャ言うな。十字架で片づいているじゃないか。でなかつ

たら、十字架は無駄死になるぞ。私を無駄死にさす気か、コノヤロー」

なんてぐらいいの気魄でね、キリストは（笑）。そうでしょ。

十字架の死を無駄死にしたらいかん。本来、十字架で死ぬようなお方ではなかつたんですよ。祈っていれば、眩い姿になつて天に昇っていくようなお方でしょ。それがわざわざ、あの十字架の死を味わって、地獄のどん底まで落ちて、しかも地獄で苦しんでいるやつを抱きあげて、復活体となつて栄光の姿で顕れてくださった。その栄光の姿に我々も同質的に変貌させようとなさっているんですよ。だから、神・キリストにおいて顕れた神の愛なんていうのは、本当にそういうもの凄いのなんですね。そういうものにしつかり心が捕らえられると、この世で何があるうが、そんなものは大したものではない。

ちようど、嵐の海を弟子たちが漕ぎなやんでいた時に、キリストが波を鎮めながら歩いてこられて、

「我なり、^{おそ}懼るな。心安かれ！」

と言われたら、ピタッと嵐も止んだ。

「あつ、これはどういうお方なんだ!？」

と、弟子たちは驚きました。ああいう姿です。

だから、皆さんも、困難にぶつかつたり何かした時に、

「主よ、あの海の荒波を踏みしめて、近づいて来てくださったあなたが、どうぞ、今、私の中に入ってください。そうすれば、私の中で今いろんな嵐があつても、そんなものはピタリと止んでしまいます。あなたは嵐にも負けないお方です」

と。それからまた、そういう荒れた海の中でキリストは船板を枕にスヤスヤと眠っておら



れたとある。本来そんな嵐に慣れているはずの漁師たちが、

「先生、先生、大変ですよ。我々は死にそうです。我々を犬死にさせるんですか！」

「お前たちの信仰はどこへいったんだ？」

と、キリストは言われましたね。そして、

「鎮まれ！」

と言つたら、パツと波も風も止んだという。

「はっ、この人はどんなひとなんだ!？」

と。あの弟子たちというのは、宗教的な訓練を受けてない人でしょ、みな。だいたい、漁師さんたちですね、ペテロもヨハネもヤコブも。そういう人たちがキリストと3年間生活して、驚きの連続ではなかったかと思う。

「これはいつたい、どういう人なんだ、この人は！」

と。そういった自然現象の中で自然現象に勝つていらつしやるだけではない。あらゆる病の人を癒してもいかれるし、本当にもう千変万化するようなあのキリストの在り方というものに、弟子たちは戸惑いと驚きで、

「これは大変なひとだ！」

くらいの気持ちではなかったかなと思うんですね。小池辰雄先生は言われた、

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり。キリストの前に降参するまでは、聖書の扉

は絶対に開かれませんかよ」

と言われました。私たちは福音書を読むときに、そういう平伏ひれふしの気持ちでなかつたら、

自分がお高いところから聖書を見下して、

「聖書をひとつ読んでやろう」

なんていうのでは、絶対に開かれない。

「平伏しの心で読まなければダメだ」

とハッキリ言われました。そういうことも思う。

コリント後書4章に戻りまして16節、

「16この故に我らは落胆きおちせず、我らが外なる人は壊やぶれるれども、内なる人は日々
に新あらたなり。17それ我らが受くる暫しばらくの軽き患難は、極めて大なる永遠の重き
光栄を得しむるなり。18我らの顧かへりみる所は見ゆるものにあらで見えぬものな
ればなり。見ゆるものは暫時しばらくにして、見えぬものは永遠に至るなり。」（コリン

ト後4・16〜18）

この箇所は本当に素晴らしいと思います。

今日のタイトルは、「キリストに顕あらわれし愛」なんです。ここからが本論になるんですが、この「愛」ということに関しては——私は今回、皆さんに宿題を出しました。祈りに関する箇所をずっと拾いあげてきてくださいと——自分もやってみました。私は、マタイ伝を



中心にまずやってみて、そしてそれが他のマルコ伝、ルカ伝、あるいはヨハネ伝ではどうだということ、そういう表を作つて、皆さんにお配りしました。

今度は、この集会が終わつてから、皆さんがなさるお仕事として、「愛」というものが出てくる箇所を旧約から新約に至るまで拾いあげてみてください。これは大変だと思いますよ。たとえば、

「神は愛なり」

というのもそうでしょう。新約聖書だけでも大変ですよ。それを旧約まで遡さかのぼれば、これはもう本当に大変な仕事だと思いますけれども。やはり、「神は愛なり」これがキリスト教の本質かもしれませんね、世間的にいいですよ。その愛が十字架に極まったわけですから。

そういう点で、

「信、望、愛、祈り」

と、昨日書いた。信は、過去の十字架を中心とした、そういった過去のものを現在化していく。望は、将来的な約束を現在に引き寄せて現在化していく。愛は何かというと、常に上から現在、無限無量に注がれてくる。これが愛だ。だから、信・愛・望は過去・現在・未来ということになって、それらを支えているのは、引き寄せていくのは祈りだ。祈りを支えてくれているのは御言だ。そして、御言を支えているのは御霊だと。私はそんなイメージをいだいているんです。

ヨハネ伝14章以下で、

「聖霊、助け主、真理の御霊が、イエスのお姿が見えなくなったあと、あなた

方と常に共にあって、あなた方を常に導いていく」

と、そういうふうに約束なさいました。「聖霊、助け主、真理の御霊」、そういうことがヨハネ伝14章から16章のところに出てきます。

そういったキリストの約束は全部、成就したんです。福音書を読む時に、その時点へ戻つて、

「ああ、これから起こるんですか」

なんていうのではなくて、もう既に起こつてしまっている。約束されたことは既にもう実現してしまっている。そういう思いで受けとっていただきたいなと、私は思います。

それで、そういう「愛」に関するところをこれから少し拾いあげていこうと。多すぎて困ると思うけれども、その中で非常に大事なところを、気づいたところを拾いあげていこうと思います。

●ローマ書5章、コリント後書11章

ローマ書に愛のことが何度か出てきますので、まずそこから見ていきます。それも飛ばして落としているかもしれませんが、気づいたところから言いますと、ローマ書第5章。4章までは、



「信仰によって義とされる」

ということを諄々^{じゆん}と説いてきて、そして、5章にいきますと、

「¹斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、

自分の立派な行いとか、そんなものではない。ただイエス・キリストを無条件に受け入れる。それが信仰です。キリストを無条件に「はい」と言って受けとる。そういう「信仰によって義とせられる」というのは、神さまが我々をお受け入れくださっている。だから、

我らの主イエス・キリストに頼り、神に対して平和を得たり。

主イエス・キリストのゆえに。何もかもキリストが我々のためにやってくくださった。そのお方によって今、神さまとの関係は、緊張関係はもうなくなっている。キリスト抜きで神さまと対面してごらん。それは義なる神さまの前に、不義なる罪なる我々が立てるはずがない。吹っ飛びますよ、それは。それをキリストは避雷針になって、神の落雷を全部引き受けて、そして、私たちに愛を流してください。だから、神さまの間はもう敵対関係はなくなっている。

²また彼により信仰によりて、今立つところの恩恵^{めぐみ}に入ることを得、神の栄

光を望みて喜ぶなり。

そういう無条件に神さまの愛を受けとるといふ、そういう姿が信仰です。そういう姿によって今立っているところの恵みの中へと引きずり込んでいただいた。

³然のみならず患難をも喜ぶ、

のみならず、神さまの栄光を望んで喜んでいふ。しかのみならず患難をも喜ぶと。

そは患難は忍耐を生じ、⁴忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じと知ればなり。」

（ロマ5・1〜4）

クリスチャンというのは、どんな目にあっても、全然へこたれない。

「倒れるれども滅びず」

とパウロは言いました。

パウロの苦難というものは大変なものだ。たとえば、パウロが自分のことを述べているのはコリント後書——自分はペテロとか他のキリストの直弟子たちに使徒として、アポステルとして引けをとらないんだと。パウロのことをとやかく批判する連中がいることに對して、パウロは弁明している——そのところがコリント後書11章の22節から、

「²²彼らへブル人なるか、我も然り、彼らイスラエル人なるか、我も然り、彼

らアブラハムの裔^{すえ}なるか、我も然り。²³彼らキリストの役者^{えきしや}なるか、

キリストに仕えるそういう役者なるか、

われ狂える如く言う、我はなお勝れり。わが労は更におおく、獄に入れられしこと更に多く、鞭^{むち}うたれしこと更に夥^{おびただ}しく、死に瀕^{のぞ}みたりしこと屢^{しばしば}次なりき。



「クリスチャンなら、何も酷い目にあわない」と思ったら、大間違いですね。パウロさんがいいお手本です。

「どんな目に遭おうともびくともしない。何となれば、キリストわれを愛し給うがゆえなり」

と、そうやって突き抜けなければ、クリスチャンでないですよ。御利益信仰ですよ、そんなものは。私はいつもモデルはパウロだと思っています。私は全然、獄にも入れられたことも、鞭打たれたこともありません。楽なもんですわ。

死に瀕のぞみたりしこと屢しばしば次しばしばなりき。

それもあります。

24 ユダヤ人より四十に一つ足らぬ鞭を受けしこと五度、25 笞しもとにて打たれしこ

と三たび、

「笞」というのは金属の鉄片が、鉄の塊かたまりみたいなものが付いている。それで狼おおかみをやつつける。それで打たれたら、肉が抉えぐられてしまう。そういうもので打たれたのが三回。

石にて打たれしこと一たび、破船に遭いしこと三度にして、

伝道旅行をやつてました時にそうだったんでしようね。

一昼夜海にありき。26 しばしば旅行して河の難、盗賊の難、同族の難、異邦

人の難、市中の難、荒野の難、海上の難、偽兄弟の難にあい、

私はこれを読んだ時に、なぜ、キリストはこんな酷い目にあわされるのだろうか。キリストがお遣わしになる、キリストが愛してやまないパウロなら、もうちよつとパウロのことを守つてあげたらいいのになと、何度も思いました。キリストがパウロを召された時に、

「私のためにあんたがどんな酷い目にあうか、どんな苦しみにあうか、それをよく

よく心得ておきなさい」

と、そういうふうなことを言つておられます。それから、何度かパウロに現れて、

「がんばるんだよ」

と、エルサレムへ行こうとしているその旅路の中で激励もなさっていますしね。こうやって、パウロはこれだけの患難にあつている。

27 勞し、苦しみ、しばしば眠らず、飢え渴き、しばしば断食し、凍え、裸なりき。

私はこんな目にあつたことは絶対にありません。断食すらしたことがない。飯を忘れたこととはありますけれども。気がついたら、飯食つてなかつたなんてのはありますけれども、自分から進んで断食なんてしたことがない。だから、パウロさんに比べたら、私なんてもう楽なヌクヌクの生活ですわ。

28 ここに挙げざる事もあるに、なお日々われに迫る諸教会の心労あり。

教会が分裂を起こしたり、仲間割れ、喧嘩、そういう異端が入り込んでガタガタになって



いる。そういうのが全部、パウロの耳に入ってくる。そのためにパウロは苦しんでいる。「ああ、行ってやるよ」なんて、すぐ行けないじゃないですか、当時の時代に。今だと、新幹線でパーツと東京まで3時間で行けるけどもさ、昔は行けませんよね。そういうのがパウロの心の痛みになっていっているわけです。

29 誰か弱りて我弱らざらんや、誰か躓きて我燃えざらんや。
ある兄弟が躓いて、あらぬ道に行こうとしている。信仰が弱っている。それがやはり自分の痛みになるという、そういう思いでいるわけですね。

30 もし誇るべくは、我が弱き所につきて誇らん。」（コリント後11：22～30）

パウロは誇り高きパウロですけども、そういうことを言っています。自分のことを、

「二つだけやはり誇りたいことがあるんだよ」

と、「第三の天に引き上げられた」ということを言っています。それは肉体を離れて行ったのか、肉体のままで行ったのか、それは知らない。けれども、その第三の天へ行って、普通ひとが見てはならないような凄い光景を見せられた。それを誇りとして自分が高ぶることのないように、刺が一つ与えられた。刺を退けてくださいと三度お願いしたけれども、それは聴いていただけなかったという。

「9 言いたもう『わが恩恵なんじに足れり、わが能力は弱きうちに全うせらるればなり』さればキリストの能力の我を庇わんために、寧ろ大に喜びて我が微弱を誇らん。」

これは慰め深い言葉ですよね。クリスチャンはみんな強者かというのと、そうじゃない。肉体的にも弱いひと、精神的にも弱いひと、いろんな人がいっぱいいる。けれども、

「そんなものは大丈夫だ。全部、キリストが背負ってくださっているから大丈夫だ。

自分を見ないで、常にキリスト讚美、それで貫こう」

と。そういう励ましだと思えます。

10 この故に我はキリストの為に微弱・恥辱・艱難・迫害・苦難に遭うことを喜ぶ、そは我よわき時に強ければなり。

患難、迫害、苦難、そんなものに出会っている。それをあえて喜ぶよと。なぜなら、我よわき時に強ければなりと。クリスチャンで、「私は強い、私は強い」と言っているのはあぶない。我々の側から見たら、「あの人は強い人だな」と思っても、本人は決してそう思っていないんだらうと思う。パウロは、自分は現実にはいわゆるアポステル（使徒）たち、キリストの直弟子たちに決して劣らないと思っっているけれども、しかし、それを誇ったりはしない。

12 我は微と不思議と能力ある業とを行ひ、大なる忍耐を用いて汝等のうちに使徒の微をなせり」（コリント後12：9～12）

我は微と不思議と能力ある業を行った。大なる忍耐を用いてあなた方のうちにアポステル



としての徴を成就した。それは事実だと。そんなことを言っております。

それから、さつきローマ書5章を読みました。ローマ書5章から脱線してしまいました。

「⁵希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛われらの心に注げばなり。」

ここが大事ですね。我らに賜いたる聖霊において、神の愛が私たちの心に注がれている。今日のタイトルは「愛」ですから。

6 我等のなご弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて、敬虔ならぬ者のために死に給えり。7 それ義人のために死ぬるもの殆どなし、仁者のために死ぬることを厭わぬ者もやあらん。

義人のために死ぬやつはまずいまいだろうと。人間は義人が嫌いなんです。けれども、情け深いやつには心を寄せる。だから、情け深い人のためには、相手のために死のうという人もいるかもしれない。

8 然れど我等がなお罪人たりし時、キリスト我等のために死に給いしに由りて、神は我らに対する愛をあらわし給えり。

されど我らがなお罪びとたりし時、キリストさまが私たちのために死んでくださった。そこに神の愛が顕れた。十字架に顕れし神の愛ということ。十字架が神の愛の、我々に対する愛の極致であるということです。

9 斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒りより救われざらんや。10 我等もし敵たりしとき御子の死に頼りて神と和らぐことを得たらんには、まして和らぎて後その生命によりて救われざらんや。

11 然のみならず今われらに和睦を得させ給える我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり。」（ロマ5・5〜11）

そのようにして、十字架がある以上、もう私たちは神さまとの間に敵対関係はない。そこで和らぎが、和睦が成立している。神さまに敵対していたときでさえ、ご自分の側から十字架を指し示して、キリストが全部、我々の背きを引き受けてくださった。それが成就して、神さまとの関係が仲直りできた。そしたら、いよいよ神さまの愛が我々に注がれて当然ではないかと。神さまを喜ぶ存在にされた。

本当に私はキリストに抱かれて初めて、神さまに対する懼れがなくなった。それまではやはり旧約を読んだりしても、神さまは恐いんです。ちよつとでも間違つたことをやったら、バシッとやられてます。本当にそう思いませんか？ だから、旧約聖書を読むのが恐かったんです、実は。ところが、このキリストにおいてすべてがもう引き受けられている。だから、キリストから離れられない。しかも、このお方は、すべてのことを全部成し遂げて、

「わが愛に居れ」

と、言つてくださっているわけですよ。



「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり。わが愛に居れ」
「人その友のために己が生命を棄つる、それより大いなる愛はなし」
と。友どころか敵対している我々のために生命を棄ててくださったわけですから。

●ペテロ前書一章

それから、ペテロ前書をちよつと引いておきましょう。これはペテロの書を受けている相手方に対して非常に激励している、励ましを与えているような、そういう文章です。ペテロ前書一章3節から読んでみます。

「³讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫にあわれみ随したがい、イエス・キリストの死人の中より甦よみがえり給えることに由り、我らを新たに生まれしめて生ける望みを懐かせ、⁴汝らの為に天に蓄えある、朽ちず汚しれず萎しまざる嗣業しきぎょうを継がしめ給えり。⁵汝らは終りのときに顕れんとて備りたる救いを得んために、信仰によりて神の力に護らるるなり。」（ペテロ前 1:3-5）

究極的な救い、新天新地の到来とか、最後の審判とか——十字架は過去の事実ですけれども——将来、本当の救いの完成の時がやってくるという。宇宙の完成といましようかね、何かそういうものを展望して、その時にいわば救いが完成する。そのために今は、神の力に護られている。それも、「信仰により」と書いてます。恵みを恵みとして無条件に受けつつている姿、それが信仰です。何かを無理やり信じ込むのではないですよ。恵みを恵みとして無条件に、「ありがとうございます」といって受けつついる姿を第三者から見たら、「あの人は信仰があるな」と、こういうことなんです。ですから、自分で「信仰があります」なんて、そんなことは全然思う必要はない。

「ありがとうございます。恵みを感謝します」

と、受けとっておれば、それでいい。そうすると、そういう人は神の力に護られている。だから、あなた方はこれからいろんな迫害、試練に襲われるだろう。でも、にもかかわらず、あなた方は大いに喜んでいてねと。喜んでいないクリスチャンというのはおかしい。

「本当にキリストのことがありがたい。キリストの十字架ありがたい。キリストがやってくれくださったことは本当に素晴らしい。天上天下キリスト以外のもの凄いものはない」

というくらいの気持ちでなかつたら、本当の意味のまだクリスチャンではないんですね。このペテロの相手方は、誰が相手方かというところ、第1章の初めに、

「イエス・キリストの使徒ペテロ、書をポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ピテニヤに散りて宿れる者、

離散のキリスト者たち、



2 即ち父なる神の預め知り給うところに随いて、御霊の潔めにより柔順ならんため、

御霊の潔めをいただいて、神の御言に、神さまに柔順であるために、イエス・キリストの血の灑を受けんために選ばれたる者に贈る。

イエス・キリストのあの十字架の血潮を注がれた、そして選ばれた、そういう者たちに以下の手紙を贈りますと、言っているわけです。だから、いわば異邦人たちです。

6 この故に汝ら今しばしの程さまさまの試煉によりて憂えざるを得ずとも、なお大に喜べり。

その異邦人たちに対して、

「あなた方は神の御力で護られている。だからこそ、これからもおい로운試練が訪れるだろう、また心配事もあるだろう。にもかかわらず、あなた方は大いに喜んでいられる。普通の人が喜べる状況で喜んでいられるのではない。普通の人ならどうして喜べない状況でもなおあなた方は喜んでいられる。これが勝利の徴だよ」と、それくらいの気持ちです。そして、

7 汝らの信仰の験は、壊つる金の火にためさるるよりも貴くして、イエス・キリストの現れ給うとき誉れと光栄と尊貴とを得べきなり。

あなた方の信仰は今、いろいろ試されている。試練に立たされている。それはちやうど、金が練られて純金に仕上げられていくように、あなた方は試練の坩堝の中で鍛え上げられていくんだ。そして、イエス・キリストが現れてくださる時に誉れと光栄と尊貴を得べきであると。次です、

8 汝らイエスを見しことなけれど之を愛し、今見ざれども之を信じて、

あなた方はイエスを見たことはない。そうですよ、イエスを見たことはない。けれども、そのお方を愛し、今見てないけれども、そのお方を信じて、

言いがたく、かつ光栄ある喜びをもて喜ぶ。

言葉で説明できないくらいに喜びに輝いている。そういう姿をここで描いています。だから、私は、クリスチャンが、ここで言われているような、こんな姿であってほしいんですよ。どんな状況の人もお、このように感謝と喜びと讚美にあふれている。

「こんなことをしてもらったから、私はうれしい」とか、

「してくれないから、私はあかん」

とか、そういった出来事、現象、運命、環境、そんなもので揺さぶられているあいだは、まだまだだと思つています。何があるかと突き抜けているパウロの姿。さっきのローマ書8章の最後の所にありますね、

「患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。何が来ようとびくと



もしない。キリスト・イエスにある神の愛から我らを引き離すものは何ひとつない」（ロマ8・35〜39）

という。この愛の勝利の絶叫。これがクリスチャンの姿だと、私はそう思っています。

このペテロの手紙の相手方もそうなんですね。あなた方は本当にいろんな試練にあつて、普通の人ならやりきれない。その中でもなお大いに喜んでいて。あたかも純金が仕上げられていくプロセスのように、試練を通してあなた方は鍛え上げられ、潔められ、完成されていくという。そして、イエスを見たことはない。でも、その方を愛している。今は見ないけれども、これを信じている。言い難く、光栄ある喜びをもつて喜ぶ。

9 これ信仰の極、すなわち靈魂の救いを受くるに因る。（ペテロ前1・1〜9）
肉体はどうせ朽ち果てる。肉体に拘つたらダメなんです。

「病気が治つた、治らなかつた」

と、そんなことで一喜一憂していたら、おかしいと思います。何があろうとも突き抜けて、キリストはご自分の愛を現してくださっている。御霊を下さっている。それでいいじゃないかと。

「己を救わんと思うものはこれを失い、わがため、福音のため己を棄ててかかる者は永遠の生命を得る」
は永遠の生命を得る」

とハッキリ、キリストは約束しておられる。それがペテロの手紙の始めのところですよ。

●ローマ書8章

そして、ローマ書8章はもう本当に素晴らしい愛の凱歌をあげていますので、そこも確認しておきます。

ローマ書8章というのは、信仰、希望、愛、それが見事に描かれています。始めの1節からだいたい17節くらいまでは、肉なる思い、霊なる思い。肉なる生なまの我、それからキリストにある霊的な新しくせられた新しい人。そういった関係、いわゆる霊の次元と肉の次元、そういうものの対立関係です。律法というものは、肉に働きかけても、何の役にも立たなかつた。本来、律法というものは霊的なものだ。それが肉なる人間存在は、律法には耐えられないといった、そういうことをずっと書いています。

キリストは正に、我々肉なる存在が神の求めに応えられなかつたものを、ご自分の肉体において神の審きを受けて、我々を霊の思いの人間に変貌させてくださる。そういうことを言っているように思います。そういう、

「イエス・キリストの中に在る者は罪に定められない」

これを小池先生は、

「今やキリスト・イエスの中に在らしめられて、在る者は罪に定められない」

と、こうふうに読まれた。ナチュラルに当然にあるような、そんなことではない。在らし



められて在る。

「本当の意味で、キリストの中に在る、なんていうことは、我々自身にはできない。在らしめられて在るんだよ、それをありがたうございませと受けとる」

つまり、受け身なんです、こっちは。みんなキリストの愛の業が、キリストの中に抱きとられることすらも、キリストの愛の業によって捕まえられて、そして、キリストの中に在らしめられて在る。その者はもはや断罪されることはありえない。なんとすれば、このお方の中には、「生命の御霊の法」が働いている。生なまの自分の中には、「罪と死の法」が働いている。それで、心の中では善を願ひ、御意を思っても、現実の自分というのはその正反対な自分だと。

24 噫われ悩める人なるかな、此の死の体からだより我を救わん者は誰ぞ。

「ああ、誰か此の死の体から救ってくれるものはあるのか」という嘆きを7章の終わりに述べて、

25 我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」

と言って、そして8章で、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。

この故に今やキリスト・イエスの中に在らしめて在る者はもはや断罪されることはない。

2 キリスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法は、なんじを罪と死との法より解放ときはなしたればなり。

なんとすれば、このイエス・キリストの中に働いている生命の御霊の法が、旧い我々の中に巣くっていた、我々を縛っていた、あの罪と死の法から完全に解放してください。十字架で完全に片づけられた。

「旧き我は既に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず、復活のキリスト、御霊のキリスト、わがうちにありて生き給うなり」

という、その事態ですね。それをここで言っている。

およそ律法は、神の御意として聖なる律法が、肉なる人間に突きつけられても、それを果たしようがない。生なまのままの人間が、神の要求に応えるなんてそもそもできっこないと、そういうことを言っている。

キリストがご自分の肉において、そういった背きの罪、エゴイズム、そんなものを全部引き受けて死んでくださったと。

「生命いのちの御霊みたまの法があなた方を罪と死の法から解き放った」という。

3 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は為し給えり、

なぜならば、肉によって、肉のゆえに、律法が願っている神の御意が実現できない。それをキリストが代わって実現してください。



即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。すなわち、己の御子を罪ある肉の形、我々と同じ姿で世につかわして、そしてそのキリストの御体、肉の姿において断罪をなさった、罪をそれに背負わされた。その目的は何か。

4 これ肉に従わず靈に従いて歩む我らの中に、律法の義の完うせられん為なり。

もはや肉に従わないで靈に従って歩む新しい私たちに、もともと律法が願っていた神の御意——御意が成就されている姿が義です——その律法が願っていた義、それは肉なる我々においては不可能だった。それを実現してくださいました。それが目的であった。そして、

5 肉にしたがう者は肉の事をおもい、靈にしたがう者は靈の事をおもう。6 肉の念は死なり、靈の念は生命なり、平安なり。

我々は靈の次元に新しく産み出された人間。だから、靈の次元の人として、我々は胸を張って生きていくんです。それには十字架を土台にしなければならぬ。

「われ既に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と。旧き我は死にました。そして新しい生命をいただきました。その新しい私たちは靈に従う者であつて、生命であり平安である。

7 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、

肉の思いは神に逆らっている。それはそもそも神の御意を実現するなんて不可能なんだ。そういうことを言っています。

8 また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。9 然れど神の御靈なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで靈に居らん、キリストの御靈なき者はキリストに属する者にあらず。

肉にある者は神を喜ばすことはできない。しかしながら、神の御靈があなた方のうちに宿っていらつしやる以上は、あなた方はもう既に肉なる人ではない。靈なる人に変貌されている。変貌せしめられてしまつているんだと。そう読みたい。しかも次のところに、

10 若しキリスト汝らに在さば、体は罪によりて死にたる者なれど、靈は義によりて生命に在らん。

キリストが、御靈のキリストがあなたの中に宿つてくださつておれば、体はこれはもう死に定められてしょうがない。でも、その体は死に定められていても、肉体は滅びても、靈は神さまの世界へ羽ばたいていく。靈は義によりて生命に在ると。そして、

11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御靈なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御靈によりて、汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

あのキリストを生命に変貌させられた、あの御靈があなた方の中に宿っているならば、「あなた方のうちに宿り給う御靈によりて、死ぬべき体を活かし給う」



と書いてある。だから、我々の肉体はどうせ死ぬんです。けれども、死ぬべき肉体にありながら、なにか聖霊というお方が宿つてくださると、違う生き方をしてくる。なにか活き活きと生きてくる。そういう印象を受けるんですね、ここを読みますと。

12 されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。13 汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。もし霊によりて体の行為を殺さば活くべし。14 すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。

そして、霊によつて、今の御霊によつて、肉のエゴイステイックなものを抑えこんでいく、そうしたら、あなた方は生きることが出来る。なぜなら、御霊に導かれていたる者は神の子だからと。

15 汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父と呼ぶなり。

そして、我々は僕の霊をもう棄てた。僕というのは絶えずビクビクしているんです。鞭打たれはしないかと、平安が絶対にならない。それに対して、我々は子としての霊——子は少々失敗したつて、ちゃんと許してもらえ。鞭打たれることはないんですね、どうも——我々は子たる霊を受けた。そして、「アツバー、父よ」と呼ぶんだと。しかも、

16 御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。17 もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。

御霊みずから私たちの霊と一緒に、私たちが神の子であるよと証明してください。神の子ならば、天国を受け継ぐキリストと共同の相続人である。共同の相続人であるならば、当然、苦しみも共にするんだと。そういうことを言う。そして、

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19 それ造られたる者は、切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20 造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望は存れり。22 我らは知る、すべて造られたるもの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。

今ときの苦しみはやがて顕れようとする栄光にくらぶるに足らずという。現状は、自然界も含め我々人間もまだまだ今は過渡期でありますから、いろんな苦しみがある。それは仕方がない。そういうことをずつと言っている。

23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて、子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。24 我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争てなお望ま



んや。²⁵我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

我らはそういう望みをいただいて救われているんだと。望みというのは将来のことで、まだ実現していない。しかし、忍耐強くその実現を待っている。そういうことを言って、そして、26節からは、

²⁶斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き歎き（呻き）をもて執成し給う。²⁷また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。

我々はどう祈っていいかわからないけれども、御霊言い難い呻きをもつて執り成してください。神さまは御霊の思いを知り給う。そして、召されたる者のためには万事が結局プラスになる。そういう非常に積極的な約束がここにあります。

御霊は神の御意に^{みこころ}適^{かな}いて聖徒のために^{とりな}執成し給えばなり。²⁸神を愛する者、すなわち御旨^{みむね}によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。

御旨^{みむね}によって召されたる者には、万事が互いに働いてプラスとなっていく。なんと積極的な言い方なんでしょうか。楽天的な。そうでしょ。

私は、キリストのところにくるまでは、本当にペシミストでした。「今はよくても、どうせまた悪くなるわ」と。とにかくマイナスにしかものを考えなかった。「今はお天気でも、どうせ雨になるわ」と、そんなふうにもうネガティブにしか考えられなかった。そんな人間に喜びが湧き上がるはずがない。目が覚めたら、「ああ、また一日が始まる。しんどいなあ」と、そこから始っていく。それがキリストによって創り変えられたら、逆転しましたね、本当に。ありがたいことでした。そして、そういったことを述べてきて、

³¹然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

神さまが私たちの味方なんだ。いったいそれに敵対するものがあるうかと。

³²己の御子を惜しまずして我ら衆のために^{わたくし}付し給いし者は、なか之にそえて^{ばんもつ}万物を我らに賜わざらんや。

己の御子を惜しまずして私たちすべてのために十字架に渡してください。くださった方は、我々に栄光の体を与えてくださるに止まらない、万物を与え給う。そして、もう今や、キリストの執り成しがあるから、何が起ころうと、キリストはかばい給う、守り給う。

³³誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。³⁴誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、我らの為に執成し給うなり。

あの十字架の上でも、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分のやっていることがわからないか



らです」

と言つて執り成された。敵対している者のためにも、そうやって祈られた。ましてや、キリストに贖われて、キリストを主と呼んでいる我々をキリストがかばわれないはずがない。いや、聖霊となつて私たち一人ひとりの中に宿り、またそばにくつついて、我々をただしき道に導き給うという、そういう思いがしております。

³⁵我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。

これはさつきパウロの患難を全部、拾いあげましたように、全部、パウロは自分で体験した。しかし、何が来ようと、

「キリストにおける神の愛から私を引き離すものは、天上天下何一つない」

と。それを高らかに勝利宣言していますね。

³⁶録して『汝のために我らは、終日ころされて屠らるべき羊の如きものとせられたり』とあるが如し。³⁷されど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余りあり。³⁸われ確く信ず、死も生命も、

相対的な死、相対的な生命も、そんなものも、

御使も、権威ある者も、

これは霊的な存在者、

今ある者も後あらん者も、

これから来ようとする者も、

力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・

イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」（ロマ8・1）

³⁹

我らの主キリスト・イエスにある神の愛から、我らを引き離すことは絶対に不可能であるという、この勝利宣言。これを我々は絶えず心に言い聞かせて、

「そうだ、何が来ようと、キリスト・イエスにおける神の愛。キリスト・イエスにおいて示された神さまのご愛、それは私たちを護つて、護つて、護りぬく。相対的次元で何が起ころうと、宇宙がひっくり返ろうと、天地がひっくり返ろうと、そんなことはどうでも、そんなことは関係ないんだ」

と、そういう本当に開き直りの勝利宣言。これをして行かないと申し訳ないと思います。

●ヨハネ第一書2〜4章

それから次に、ヨハネ第一の手紙を開いていただきたいと思います。だいたい、ヨハネの手紙は「永遠の生命」のことを語り、そして、

「神の愛は、御子を信ずる者を一人も滅びないで永遠の生命を得る。終わりの



時に甦る。これが神さまの御意だ^{みこころ}」

ということを繰り返して書かれています。そのためには、

「我をくぐらえ、我を飲め。私と本当に一つになれ。人を活かすものは霊であつて、肉は役立たない」

という。霊というのは神さまから来るものです。肉というのは自分から出るものです、ナチュラルなものです。ナチュラルな人間アダムではダメで、第二のアダム、天から新しく与えられた、霊的存在者、それに成れと。そのためにキリストは十字架にかかって道を拓いてくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。この私を通らなければ、天の次元、神の次元、父の御許には行けないよ。狭い門、細き道だ。しかし、そこをあなた方は突き進んで生きなさい」

ということを、

「狭き門より入れ」

ということ saying っておられます。

そういう道を拓いてくださったその神の愛のことを、ヨハネ第一の手紙が繰り返してつたえていますので、そのポイントだけ拾ってこうと思います。

第2章のところでは、兄弟を愛しあう、兄弟姉妹が互いに愛しあう。それが実現していなかったら、まだまだそれは本当の意味で神の愛を受けていることにはならないということと言います。2章8節から、

「8……真の光すでに照りて、暗黒はややに過ぎ去ればなり。9光に在りと言いて其の兄弟を憎むものは、今もなお暗黒にあるなり。10その兄弟を愛する者は、光に居りて顛躓その衷になし。11その兄弟を憎む者は暗黒にあり、暗きうちを歩みて己が往くところを知らず、これ暗黒はその眼を矇したればなり」

真の光すでに照りて、暗黒はとづくに過ぎ去ってしまった。光の中に在りと言って兄弟を憎んでいる人はまだ暗黒の中に止まっている。兄弟を愛する者は、光の中に居りて躓きはない。兄弟を憎む者は暗黒の中に止まっている。しかも、暗黒の中を歩んで自分でどこへ往くのかそれもわからない、目が見えない、そういう状況にあるということと言います。それから15節、

15なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし。16おおよそ世にあるもの、

この「世」というのはどういふものかということ、

即ち肉の慾、眼の慾、所有の誇りなどは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。



こんなものをあげている。だから、この世で尊ばれている、財産、名誉、その他さまざまなものがありますね、人が心惹かれていくようなもの。そんなものに振り回されるのではないよと。そういうものを越えた、本当のものに目を注ぎなさいと。そう言っているのだと思います。肉の慾、眼の慾、所有の誇り、それは神さまから出ていない。世から出ています。エゴイストの世から出ている。そんなものに心を誘われるようではダメだよと。

17世と世の慾とは過ぎ往く、されど神の御意をおこなう者は永遠に在るなり。

世と世の慾とは過ぎ往く、されど神の御意をおこなう者は永遠に留まるなりと。こういう生き方が本当の生き方である、ということを言っています。

それから、もうひとつ大事なことは、聖霊の油そそぎ。神の御言、神の御意を本当に知らせてくれるのは御霊なんだ。人ではない。聖霊があなた方を導いて行くだよ、ということと言っています。27節、

27なんじらの衷には、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教うる要なし。

「主より注がれたる油」とは聖霊です。それがとどまっているが故に、人さまからいろんなことを教えてもらう必要はない。つまり、人間の知恵、そんなものによる必要はない。

此の油は汝らに凡ての事を教え、かつ真にして虚偽なし、汝等はその教えしごとく主に居るなり。

この聖霊という油があなたに必要なことをすべて教えてくださるからと。そういうことをここで言っています。

それからヨハネ第一の3章。これはあなた方はいったいどういうものであるか、ということを高らかに宣言しているところです。

「一視よ、父の我らに賜いし愛の如何に大なるかを。我ら神の子と称えらる。既に神の子たり、

すでに神の子であると。

世の我ら知らぬは、父を知らぬによりてなり。愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、

我らはいま既に神の子である。では将来どうなっていくのか、それはまだわからない。まだ顕れていない。

主の現れたもう時われら之に肖んことを知る。我らその真の状を見るべければなり。

主の現れたもう時それとそっくりさんに変貌する、と書いてある。われらは之に似た姿になる。なぜなら、その真の姿を見る。キリストの真の姿を見たら、それと同じそっくりさんに我々も変貌させられていく。ありがたいことが書かれていますね、ここに。

3凡て主による此の希望を懐く者は、その清きがごとく己を潔くす。



希望というのはまだ実現していませんからね、将来実現する。それを懐いている者は、やはり主の心を大切にす。主が清くあられるように自分たちも潔くありたいと、そういうふう生きていくはずだと。それから、9節へいきますと、

9 凡て神より生るる者は罪を行わず、

すべて神より生まれる者は罪を行わない。なぜなら、

神の種、その衷うちに止まるとどるに由る。彼は神より生るる故に罪を犯すこと能わず。

聖霊がその人の中に留まつているからである。大胆にそういうことまで宣言されています。

それから、兄弟姉妹が互いに愛しあいなさいということが言われて、13節、

13 兄弟よ、世は汝らを憎むとも怪あやしむな。14 われら兄弟を愛するによりて、死

より生命に移りしを知る、

もう既にあなたの中には永遠の生命が宿っている。肉体の生き死に、そんな問題ではないよと。愛せぬ者は死のうちに居る。

15 おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。

愛を知らない人、愛しない人はまだ霊的には死の中に留まつている。おおよそ兄弟を憎む者は即ち人殺しだと。その中には永遠の生命なんか絶対にありえない。そして、16節、

16 主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、

我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ一3・1〜16）

これは本当に素晴らしい言葉です。

「主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり」

と。愛というのは決して感情的な、なにか「好きだよ、愛しているよ、チュー」なんていう、そんなレベルではないよと。

生命を棄ててくださった。しかも、神に逆らっている罪びとなる我々のために、聖なる神の子キリストが――祈っていれば眩い姿で天へ昇っていくお方――その栄光を棄てて、我々のマイナスを全部ひつかぶって、そして我々に、本来キリストがただだかれるべき生命を私たちにまず下さった。そういうお方を神さまの側で放っておくはずがない。キリストを素晴らしい姿にまた変貌させられ給うた。まずは、ご自分を我々罪びのために犠牲として献げてくださった。十字架に顕れしイエス・キリストの愛。それをお認めになった父なる神の愛。

キリストが十字架にご自分をおかけになつて、我々のために死んでくださった、キリストの愛。これはみんなわかります。けれども、それを望まれた父なる神。これはどんなに大変かと思うんですよ。おおよそ親が、自分の子どもがそういう惨むじつたらしい死に方をせねばならない、それを「えへへ、よかつたね」なんて、そんな親がどこにいるかという。子どもが苦しむということは、それ以上に親が苦しんでいる。しかし、それをあえてしな



けば、人々は救われない。

「済まんけれども、死んでくれ」

というのが、それがゲッセマネの祈りのお答えだと思っんです。

「なんで私があなたから引き離されて、地獄へ落ちる。暗黒の中に行かねばならないんですか。私は今までちつともあなたの意に背いたこころそむことがありません。あなたと私はいつも一つでした。それをなにゆえに、私は引き裂かれて、あなたのない世界、味わったことのない世界へ、私が突き落とされなければならぬんですか」と。そういうふうには私はあのゲッセマネの祈りを受けとっている。未だイエスが味わったことのないような世界へ今、突き落とされようとなさっている。しかも、イエスの側には何の理由もないんです。理由があれば、

「わかりました。仕方ありません」

と。それは我々が言う言葉です。我々はどんなに神さまから審かれようと、何の言い逃れもできない。

「義人なし、一人だになし」

とは、みんなエゴイストだ、みんな背いている。「神を信じている」なんていっても、自分の幸せのために信じているだけ。神さまを利用していただけなんです。

「神の故に、神の栄光のゆえに」

なんて、そんなことは誰も祈らない。クリスチャンとえども、そうです。でも、キリストは神さまが一切です。

「父よ、汝の御意が天に成るごとく、地にも、この身を通して成らしてください」

い

と、始めっから自分を献げきっておられる。これが義という姿でしょ。また、父なる神の愛に應えておられる。義と愛とが一つになっている。それが今、引き裂かれて地獄に突き落とされようとなさっている。

「なぜなんですか？」

と、当然、イエスが祈られるのは当たり前だと私は思っているんです。けれども、応えない。そこで、

「わかりました。御意に従います」

と。立ち上がって、あの十字架を背負って、ゴルゴタの丘を行かれた。それを本当に冥想するだけで涙が出ますよね。

なぜ、あのお方があんな苦しみをお受けにならねばならなかったんですか。それと自分とは関係ないと思ってきたんです、今までは東洋人として私は。あんなものはヨーロッパの宗教だと。ところが、どっこい実は、あの十字架においてご自分を棄てられた、あのご愛によって、私は無条件に神の子にされた。道を開いてくださった。



「我は道なり、真理なり、生命なり。私を通らなければ、誰も父の御許、永遠の世界には行けない」

「ありがとうございます」

と。だから、私は、キリストさまの前にはもう頭こゝろを垂たれるだけ。何一つ文句を言うことはありません。どんな運命環境にこれから襲われるかわかりませんが、そんなことはどうでもいい。

「主よ、あなたにおいて顕れた神さまのご愛だけを私は訴え続けていきます」

と、そんな気持ちです。もうあと余命いくばくもありませんけれども、私はそういう思いでおります。皆さんはどうですか。「自分、自分、自分」で動いてほしくありませんね、私は。

「主さま、あなたの御意だけが大事です。あなたの御意がこの私を通し、僕しもべ、婢女はしためを通して、どうぞ、地に成つてください。この地はなおあなたを拒んでいます。

あなたに逆らっています。しかし、その果ては滅びです。あなたは、それに耐えられないといって嘆かれました。どうぞ、その嘆きを共にしながら、あなたの祈りを祈りとさせてください。自分自身がどうなろうと、そんなことはもうどうでもいいんです。主よ、どうぞ、あなたと一つにならせてください」

「まあ先生くらいな歳になつたら、そうなるよな。私はまだ早すぎるよな」

なんて（笑）、そうじゃないんですよ。明日の命があるかどうか誰も保証してませんよ。そうでしょ。だから、

「朝あしたに道を聞かば、夕べに死すとも可なり」（論語）

という言葉があります。本当のものに触れたら、もうそれで、

「アーメン、ハレルヤ！ いつでもこの身を、生命をお取り下さっても結構です」という、そのくらいの気持ちです。

日本人は武士道というものを尊びました。新渡戸稲造にととべさんは、武士道というものを尊んで、そしてその延長上にキリストを持つてくるという。内村鑑三もそうでした。そうなつたら、一本、筋が通っている。単なる御利益とか、いいことばかりが伴うから信ずるとか、そんなレベルではない。キリストご自身が、

「父よ、汝みこころの御意が天に成るがごとく、この地にも成らしめたまえ、この私を通して」

と、まず自分を献げきつておられますね。クリスチャンというのは己をキリストに献げきつている姿、それで生きる者です。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるあらず」

これを本当に日々生きていく。その者を神さまの方で放っておくはずがない。ご自分の僕としてお用いくださるんです。



「僕としてお用いください」
と立候補するやつが少ないらしいんですね、どうも。神さまの側から言うのとだから、我々は本当にキリスト道を生きる者、それは自分の幸せとか、そんなものにも執着しない。

「どうぞ、あなたの御意をわが意として、あなたと本当に一つになって生きる者としてください。どうぞ、この身を通して、あなたの御意が、あなたのご愛が人々に流れていきますように。そして、人々が本当の意味で救われますように。この身をお用いください」

と、そうやって献げているのがクリスチャンではないでしょうね。

もう一度、ヨハネの手紙第一の3章に戻りますと、

「16主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」

そして具体的には、

17世の財宝をもちて兄弟の窮乏を見、反つて憐憫の心を閉づる者は、いかで神の愛その衷にあらんや。

金銀財宝を持ちながら、兄弟が経済的に困っている。それに対して憐れみの意を閉じる。そんなものは全く神さまのご愛とは無関係で、無縁な人間だと。だから、口先だけで愛するのではなくて、行いと真実をもってやろうじゃないかと、呼びかけています。

18若子よ、われら言と舌とをもて相愛することなく、行為と真実とを以てすべし。19之に由りて我ら真理より出でしを知り、且われらの心われらを責むとも神の前に心を安んずべし。

これによって私たちは真理から出ていることを知る。そしてまた、私たちの心が良心の咎めがなくなり、そうすると神さまの前に平安に居ることができると。しかも、

20神は我らの心よりも大にして一切のことを知り給えばなり。21愛する者よ、我らが心みずから責むる所なくば、神に向いて懼なし。

神さまは私たちの心よりもはるかに大いなるお方である。一切のことを知ってくださいっている。神さまの前にやましいことがないならば、神に対して懼れがない。しかも、

22且すべて求むる所を神より受くべし。是その誠命を守りて御心にかなう所を行えばなり。23その誠命はこれなり、即ち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じ給いしごとく互に相愛すべきことなり。24神の誠命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給う。我らその賜うところの御霊に由りて其の我らに居給うことを知るなり。」（ヨハネ一3・16〜24）

これは全部、本当のことですね。こういう言葉に触れて、

「これはちよつとレベルが高すぎて、ダメですわ」



とか、そんなことを思わないでください。こういう素晴らしい次元の中に私たちを抱き取ろうとしてみてください。ありがとうございますと。もはや、自分なんか見ない。

「主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり」ということが、またその次に出てきます。

ヨハネ第一の4章にいきます。

「1愛する者よ、凡ての霊を信ずな、その霊の神より出づるか否かを試みよ。多くの偽預言者世に出でたればなり。2凡そイエス・キリストの肉体にて来り給いしことを言いあらわす霊は神より出づ、なんじら之によりて神の御霊を知るべし。3凡そイエスを言い表さぬ霊は神より出でしにあらず、これは非キリストの霊なり。……之によりて真理の霊と迷謬の霊とを知る。

それから大事なことは次の7節からです。

7愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生まれ神を知るなり。8愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。

9神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。10愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給いし是なり。

「宥めの供物」なんていうと、なんか神さまがかんかんになって怒っているから、それを宥めるために何か犠牲の献げ物をするという。それは我々にはあまりピンと来ない思想だと思えますけれども。我々のために犠牲の血を流してくださった、罪を贖ってください。このように十字架において神の愛は顕れたんだと。十字架がなかったら、私たちはいつまでも神さまと敵対関係にある。「アバ、父よ」なんて呼べない。その妨げを全部、十字架で片づけてくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。我は門なり」

と、そうやってキリストが本当に開いてくださった。その大道を私たちは平伏し歩んで行くという、そういうことなんです。

11愛する者よ、斯くのごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし。12未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。13神、御霊を賜いしに因りて、我ら神に居り神われらに居給うことを知る。14又われら父のその子を遣して世の救主となし給いしを見て、その証をなすなり。15凡そイエスを神の子と言ひ

あらわす者は、神かれに居り、かれ神に居る。

おおよそイエスを神の子と言ひあらわす者は、その人の中に神さまは居てください。その人は神さまの中に居る。「われ主の中に、主わがうちに」と。ここでは「神」と書いてます



けれども、我々は「キリスト」です。キリストさまの中に宿れば、そこが神の懐ふところであります。「われ主の中に、主わがうちに」

と。小池先生の雑誌は『エン・クリスト』(EN CHRISTO キリストの中に)です。それは、われ「主の中に」と、それを表しているのがあの『エン・クリスト』という雑誌の名前です。そのような神さまの愛をしつかり受けとれば、神の審判なんて全然恐くない。そして、私たちは主のように、主の御意を生きて貫いて行くからである。

18 愛には懼おそなし、全まったき愛は懼を除く、懼には苦難くるしみあればなり。懼おそるる者は、愛いまだ全からず。」(ヨハネ一4・1〜18)

●「コリント前書13章

最後に、コリント前書13章を開いて終わりしたいと思います。

とかく、宗教家というのは、

「自分は宗教的にこれだけの行を積んできた」

とか、あるいは、

「自分にはこんな賜物たまものがある。異言の賜物、預言の賜物、病を癒す賜物」

とか、いろんなそういうった現象面で人に見せて誇りとするような。それを拠り所として、

「だから、私の信ずる神さまを信じなさいよ」

ということがちなんですが、そういうことに対してパウロは、

「ノー、そうじゃない」

と言っているのが、このコリント前13章だと思う。12章では、賜物のことをさんざん言っている。それぞれに必要なに応じて賜物を与えておられる。しかし、それに囚われてはいかんと。それが13章です。

「1たとい我もろもろの国人くにびとの言および御使みつかいの言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く鑄鉄ちようてつの如し。

もしも私に愛がなかったら、それは何の意味もないと。

2 仮令たとわれ預言する能力ちからあり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの大なる信仰おおいありとも、愛なくば数うるに足らず。

大いなる信仰があろうと、もしも愛がなければ、そんなものは問題じゃない。

3 たとい我わが財産をことごとく施し、いかに愛がありそうなわざですな。

又わが体を焼かるる為ために付すとも、愛なくば我に益なし。

あるいは焼身自殺までやってみせる。そんなことをやろうと、もしもそれが本当の愛から出ていなければ、全く無意味だと。では、愛とはどういう姿か、というのが4節から、



4 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、^{たかぶ}驕らず、^{たかぶ}非礼を行わず、己の利を求めず、

この「己の利を求めず」が最も大事だと思いますね。

憤^{いらい}らず、人の悪を念^{おも}わず、^{いらい}不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、

7 凡^{おおよ}そ事忍び、^{おおよ}おおよそ事信じ、^{おおよ}おおよそ事望み、^{おおよ}おおよそ事耐うるなり。

忍び貫^ぬき、信じ貫^ぬき、望み貫^ぬき、耐え貫^ぬくという。貫^ぬく。だから、目の前の出来事によって、現象によって一喜一憂しない。そういう姿だと思ふ。忍び貫^ぬき——あるいは荷い貫^ぬきといつてもいい——信じ貫^ぬき、望み貫^ぬき、耐え貫^ぬく。

8 愛は長^いくまでも絶ゆることなし。然れど預言は^{すた}廃れ、^{いげん}異言は止み、知識もまた^{また}廃らん。

預言だとか、異言だとか、その他のものはみな一時的なものである。必要に応じて神の方から与えてくださる。それは永遠のものではない。しかし、本当のものは、今述べました、信仰と望みと愛。これは最後に出てきますね、13節に。

13 げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存^{のこ}らん、而して其のうち最

も大^{おお}なるは愛なり。」（コリント前13・1〜13）

「キリスト教はどんな宗教ですか？」

と聞かれたら、

「愛の宗教である」

と、そういう答えがきつと一番ふさわしいのかと思います。しかし、その愛というのは、感情的な愛する愛ではない。

「神さまが御子キリストを我々のために遣わして、御子の犠牲の十字架の死によって私たちを神の子に仕立てあげてくださった。変貌させてくださった。そういう御子の犠牲の上に成り立っている愛である」

ということ。そういうことをしっかりと心に刻んでおきたい。その御子をいただいていたなら、我々はどんな目にあいませしても、それで神を恨^{うら}んだり、咬^ついたりということはあり得ないと思つています。御子キリストにおいて^{あらわ}顕れし神の愛、これがすべてを荷^{にな}つていく。私はそういうふう日々、思つて生きています。自分がどんなに出来損ないでも、そんなことは問題にしない。これが十字架です。

「あなたが自分でブツブツ言っている嫌な自分は全部、十字架で片づけた。あなたを新しいものに創^{つく}り変えた。だから、私を信じて一緒に生きていこう。天の高みへ昇^あつていこう」

と。そういう非常に積極的な面があるということ。悟り澄ましとか、諦^{あきら}め——諦^{あきら}めとは明かに見るといふこと——明かに見たら、希望はありません、この世というのは。そういうのじゃなくて、神さまがご用意くださっている素晴らしい霊の次元の御国、その御国に向



かつて旅をしていく。そして、たくさんの方々と一緒に連れて行くという、そういう旅路を私たちはキリストのゆえに歩まされているのではないか。そして、日々、感謝、讚美、祈り。それが私の願っている在り方です。

はい、それでは、これで終わりといえます。しばらく、黙祷をお願いいたします。

● 祈り

主イエス・キリストさま、金曜日の夜から今に至るまで、二泊三日のこの特別集会をあなたが豊かに祝福してくださいまして、あなたを慕うお一人お一人をここに呼び集め、そしてこの所において御霊、御言を、一つとして、一体として、我々にお与えください、

「われ生くれば、汝も生くべし」

と、主さまがあの栄光のお姿で顕れてくださった、ご復活のすがた、それに私たち一人ひとりとみあらずからせ、そして、昇りゆく世界は、先は神さまの輝かしい天国であると。この世の次元でない、霊の次元、その次元に私たちを導いてくださっていることを、我々は信じ感謝いたします。

主さま、見ゆるところにあらず、見えぬものに目をそそぐ。見ゆるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからである。本当に聖書は、福音書といい、またパウロ、あるいはヨハネ、ペテロの手紙といい、本当にこの永遠の世界のことを、真理の世界のことを、我々に開示してくださっていますことを感謝いたします。

「天地は過ぎゆかん、されど、わが言は永遠に過ぎ行くことなし。我は今日も、

明日も次の日も進み行くべし」

と、盛んなる主イエス・キリストさまのお姿、これが私たちを引っ張って行ってくださいますから、感謝でございます。

主さま、あなたの下さった希望、喜び、平安そして愛。こうしたものを、どうぞ、私たちの身近な所にいる方々に、お互いに分かち与え、分かち合い、そして共に御名を讃える、そういう神の民としてくださるように、私たち一人ひとりをお用いくださるように、こいねが希いたてまつります。

また、この世において本当に病める方、悩んでいる方が多いです。身近な所にもいます。どうぞ、そのそばにあって執り成し、祈り、あなたの愛の御意がその方々において成就していくように、ひたすら執り成しの祈りをなさしめてくださるように、お願いいたします。

一切のことを感謝して、主イエス・キリストの御名を通し、この讚美と祈りと感謝を御前にお捧げいたします。アーメン。

